

聖書：マタイ 7：7～11

説教題：求めなさい

日時：2018年10月21日（朝拝）

私たちは毎日の生活をどのように歩んでいるでしょうか。特に何に頼って歩んでいるでしょうか。いや私は何かに頼るということはしておらず、自分の力で歩んでいると言う人が多いかもしれません。おそらく多くの人がそうではないかと思います。みな自分の力で何とか歩もうと努力しています。しかしもしその自分自身に力がないということ、自分の無力さを感じたらどうでしょう。前に読んだ6章34節に「苦労はその日その日に十分あります」とありました。私たちの毎日の生活には多くの苦労があります。私たちはそれらに囲まれながらどうやって生きて行くことができるでしょう。そんな私たちに今日の箇所は素晴らしいメッセージが語っています。7節：「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」すなわち祈りへの招きです。これは弱さを覚える私たちへの大いなる励ましのメッセージです。

まずこの言葉が置かれている位置に注目したいと思います。聖書を読む時に大切なことは、いつもその前後関係、文脈の中で考えることです。ある人は直前の7章1～6節との関係を指摘します。そこで「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。」とありました。すぐに人をさばいてしまいやすい私たち。自分の目には梁が入っているのに、それを問題にしないで、他人の目の中のちりに目を留め、云々しやすい私たち。「偽善者よ。まず自分の目から梁を取り除きなさい。」と言われました。まず私たち自身に大きな課題がある。また6節では識別力を持つべきことが言われました。このような御心を示されて、私たちは自分自身の無力さ、貧しさを思わずにいられません。そういう私たちに7節以降の言葉があるということです。「求めなさい、探しなさい、たたきなさい」と。すなわち神のあわれみと恵みを求めるように！と。確かにそうだと思います。しかし7章1～6節の部分だけでなく、もっと広く、これまで見て来た山上の説教全体を視野に入れて今日の御言葉を捉える方が良いのではないのでしょうか。

山上の説教は5章3節から始まりました。「心の貧しい者は幸いです」から始まって、天の御国に属する人の価値観や生き方が教えられて来ましたが、細かくは振り返りませんが、たとえばあなたがたは「地の塩、世界の光」だと言われ、あなたがたの良い行いを

見て人々が天にいるあなたがたの父をあがめるようにしなさいと言われました。またあなたがたの義は律法学者やパリサイ人の義にまさる義でなくてはならないと言われました。その中で、自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさいと言われました。また宝は地上にではなく天に蓄えなさいと言われました。また神の国と神の義を第一に求めよ、そうすれば必要はすべて神によって満たされる心配無用の生活があると言われました。ある意味で理想的な世界です。このように生きられたらどんなに素晴らしいか！と思います。しかし現実の私はなかなかそのように生きることができない。そしてともすると失望・落胆してしまいがちです。私にこのように生きることは無理であると。そんな私たちに対して今日の御言葉は神に祈るように！と言っています。すなわち恵みによる生活です。自分の力で歩むのではなく、神にそのための力を求めて生きるように！との励ましです。

さてイエス様はここで何と仰っているのでしょうか。ここに「求めよ」「探せ」「たたけ」と三つのことばが語られています。ある人はこれはだんだん意味が強くなっていると言います。「求める」ことは座っていてもできるが、「探す」ためには歩き回らなければならない。さらに静かに歩き回るだけよりも、閉まっている戸をドンドンと「たたいて」探す方が、より力のいることであると。祈りはそのようにあるべきである、と。それはそうだと思います。しかしそこまで熱心に執拗に祈らなければ、神に聞いていただくことはできないということを言おうとしているではありません。ここでイエス様が強調していることは、私たちの祈りは聞かれるということです。7節を見ると、今見た3段階のプロセスを最後まで進んでから祈りは聞かれるとは言われていません。そうではなく、「求めなさい。そうすれば与えられます。」「探しなさい。そうすれば見出します。」「たたきなさい。そうすれば開かれます。」と、1回1回の祈りに対する神の応答があるという約束が繰り返されています。8節も同じです。「だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。」 ポイントは祈りは神に聞かれるということです。そのことを三つの言い方を重ねることによって、イエス様は強調し、私たちの弱い心を鼓舞しようとしておられるのです。

しかしこれは本当に信じられることなのでしょうか。イエス様はそのことが私たちの心に深く受け止められるように9節以降の話を続けて行かれます。9～11節：「あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自

分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。」ここでイエス様は、神と私たちはどんな関係にあるかということをもう一度思い起こさせてくださっています。その関係は父と子の関係です。私たちは神の前に罪を犯した者として、本来たださばきを受けるにふさわしい御怒りの子らでしたが、神は私たちの救いのために一人子イエス様を遣わし、私たちの身代わりに十字架に付けてくださいました。そのことを感謝してキリストを信じる者は、その罪を赦され、さらにキリストにあって神の子どもとされると言われています。まずイエス様がここで語っているのは人間の父と子の関係です。子どもがパンを求めているのに石を与える親はいない。あるいは魚を求めているのに蛇を与える親はいない。今日、虐待する親のことが報道されたりしますが、ここまでの人はまずいないでしょう。注目すべきはイエス様が 11 節で「あなたがたは悪い者であっても」と言っていることです。これは人類の罪の普遍性について言及している言葉です。アダムとエバの墮落以降、人類はみなこの罪の中に生まれ、罪の性質を引き継いで生きています。しかしそんな悪い者たちであっても、自分の子どもには害となるものは与えない。良いと思うものを与える。とするなら、なおのことあなたがたの天の父は！と言っています。天の父は私たち人間の父と違って完全なお方です。何の欠点もない方。最も聖く、最も愛に満ちた方。とするなら私たち子どもとされた者たちが求めるなら間違いなく与えてくださる。私たちをご自身の子どもとして愛しておられる天の父は喜んで私たちの求めに聞いてくださる。そして必要なものを与えてくださる。

私たちは果たして神をそのような方として見ているのでしょうか。私たちはお祈りの時、「天の父なる神様」と祈り出しますが、その言っていることを本当に信じているのでしょうか。私たちの求めに喜んで耳を傾けて下さる天のお父様を仰いでいるのでしょうか。頭では、今や神は私たちの父であること、私たちはその子どもとされたことを知っています。しかしもしかすると心では本当にはそう思っていない。むしろ神は私に怒っておられる。私なんかには良い顔を向けてくださるはずがない。従って良いものをくださることもない。そのように考えて祈りをやめてしまっていることはないのでしょうか。しかしそうではないのです。神は御子にあって私たちを赦し、受け入れてくださいました。確かに信じて、その後には犯した罪については、そのたびに告白し、悔い改めることが求められています。そのたびに新しい赦しと聖めが必要とされています。しかし神は私たちをキリストにあって一旦子として受け入れてくださったなら、それからずっと永遠に子

として育んでくださいます。もし人間の父が、その子どものために喜んで耳を傾けるなら、ましてや天の父は喜んで私たちの求めに耳を傾け、ご自身の恵みの御手を動かしてくださるのではないのでしょうか。このような方が私たちにはおられるのに、この方に目を向けず、日々求めずに生活するとは一体私たちは何をしているのでしょうか！神は人間の父にはるかにまさって私たち子どもたちの声に聞き、その恵み深く、全能である御手を動かしてくださる方です。私たちはこの天の父を信じて、感謝して、日々この方に求め、導いていただく生活へ進むべきではないのでしょうか。

しかしある人は言うかもしれません。私はそのように信じて神に祈った。しかし願ったものは与えられなかった。だからこの約束は真実ではない。私は信じて祈り続けることはできないと。しかしここで私たちの祈りが全部その通りに聞かれるとは言われていないことにも注目すべきです。そこには条件があります。それは天の父は「良いもの」だけを下さるということです。ここに時に私たちの祈りが聞かれないと思われることに対する一つの答えがあります。私たちは自分ではこれが良いと思って祈っていても、それは神から見てひどく有害なものであるかもしれない。その場合はいくら私たちが一生懸命に祈っても、天の父は決して与えないのです。天の父は良いものだけを私たちに与えるからです。前にお話したことがあると思いますが、私が6歳の時に山形県から宮城県に引っ越す時、母や祖母が家の掃除をしていてハッと気がつくと、私と弟が雑巾を絞って真っ黒になったバケツの水に口をつけて、それをふざけて飲んでいたそうです。ちょっと信じられない話です。それを見た母や祖母は当然、「やめなさい」と言ってバケツを取り上げます。いくら私たちが「もっと飲みたい！もっと飲みたい！」と叫んでもです。雑巾で真っ黒になった水は体に害を与えるので、いくら私と弟が金切り声を上げて求めても、親は与えない。私たちはこのように、時として自分に害となるものを「欲しい！欲しい！」と求めるかもしれない。しかし神は良いものでなければ、私たちにくださらないのです。

私たちは自分の祈りが聞かれないように思う時、文句の気持ちが起こって来るかもしれません。しかしもし反対に自分の祈りが全部聞かれるとしたらどうでしょう。ある人はもし自分の祈りが全部無条件で聞かれるとしたら怖くて祈れなくなると言いました。自分は自分にとって何が最善であるか分からないから、もしかすると自分にとってひどく有害なものを求めてしまうかもしれない。それを神がストップなさらず与えて下さったら大変なことになる。そうだとしたら祈ることは大変な重荷になる。それは重大過ぎ

る危険な作業となり、下手に祈らない方が一番安全であるということにもなってしまいます。確かにそうでしょう。しかし幸いな事実は神は取捨選択して良いものだけを下さるということです。神がそのようにしてくださることは大きな慰めです。それゆえに私たちは安心して祈ることができるのです。

私たちは有名なⅡコリント 12 章に記されているパウロの祈りのことも思い起こします。彼は彼にとって肉体のとげと表現されるある悩みを主に取り去ってほしいと何度も祈りました。しかしあのパウロの祈りもある意味で聞かれませんでした。それは、その肉体のとげがあるままの方が彼にとってはかえって良いことになるからということでした。その弱さを持っている方が一層神により頼み、その弱さを補って余りある神の十分な恵みの力に生きることができるからということでした。詩篇には「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」という言葉もあります。苦しみは少ない方がいいと私たちは思います。それを取り去ってくださいと私たちは祈ります。しかし私たちの経験を振り返ってみても、思うように行かなかったことを通して、もっと深く、自分の人生にとって大事な学びをするようにと導かれたのではなかったでしょうか。天の父は自動的に私たちの願いをかなえるのではなく、私たちに良いことのみをもたらしてくださるのです。

ですから私たちはただ自分の心の思うままに、ああしてください、こうしてくださいと祈るのではなく、神に良しとされるような祈りを祈って行くことが大切であることとなります。すなわち御心にかなう祈りをささげることです。そうでないと自分勝手な祈りばかりをささげて、神はさっぱり聞いてくださらないと文句ばかり言う人になりやすい。そうならないためには、聖書を通して神のみこころを益々学んで行くことが肝要です。その中で私たちが本当に祈り求めるべきことは何かが分かって来る。これまでの山上の説教で見て来たことと言えば、益々心の貧しい者となること、義を追い求める人になること、平和を作る人になること、自分の敵を愛し、そのために祈る人になること、天に宝を積むこと、まず神の国と神の義を求めて、神の祝福に生きる人となること、…。これらは天の御国での生活にまでつながる真に良いものです。それを祈り求めて行くなれば、神はその祈りに豊かに答え、恵みを加えてくださるのです。

私たちはこの素晴らしい約束を改めて握り直して、新しく歩みたいと思います。天の父は私たちその子どもたちの祈りに喜んで耳を傾け、事を導いてくださいます。私たち

はこの方を知り、感謝している者として、一日たりともこの方に祈らず過ごすことがないようにしたい。神は私たちの祈りに聞いて、ご自身の最善の知恵に従い、良いものだけを私たちにくださいます。その神がこの世界におられ、すべてを支配していることを喜び、また慰めを覚えて、日々私たちの天の父に求め、上から力強く導かれるその子どもたちの幸いな歩みへ進みたいと思います。